

R18
COUTION!
ふたなり
FUTANARI
はし
DENTIST

ふたなり×
なりたて
社会人

基本CG 7枚
本編総枚数94枚

Minato&Takashi

FUTANARI SENPAI neo
夢のような
歯医者さん
Dreamy dentist



オレの名前は
雪代タカシ。

この春、
新社会人となる、
背広姿も初々しい
ピチピチの男子だ！

……なんて、
オレ、
誰に自己紹介
してるんだ？



ピチピチなのは
さておいて。

入社式の前に済ませておかなければ
ならないことのために、
今日は保険証を持ってここにきたんだ。
ここ……歯医者。

何よりも嫌いな、
歯医者だ。
歯医者の椅子に座って
だけで歯が痛い。



いや、歯が痛いのは元々で、
そもその原因で、
それを治しにきたのが
歯医者のはずなのに。

ううう……
オレが支離滅裂なのは、
歯痛のせいと思ってくれ。

あと、無意味にスーツを着ているのは、
新社会人の予行練習だと思ってくれ。

ともあれ、オレは今、
ドキドキしながら
あの椅子に座って、
治療されるのを待っている
ところなんである。



朝一番で受付を済ませた。

ちらつと見た壁の時計では
……既に5分くらい待たされてる。

じらしプレイなのか……。

治療するんだから痛いのが覚悟している。
せめて美人の歯科助手が
来てくれるといいなあ……。

ぼんやりと考えながら
目を閉じて待った。





雪代さん。
今日はどう
なさったんですか？

涼やかな声に
うつすら目を開けると、
そこには

……先輩がいた！

うっわ
……
せ、せんぱい？

はい？

知らないふりして
小首を傾げているけど、
多分先輩、

だよな？



この状況……
説明、難しいな。
先輩っていうのは、
オレの学校時代の
先輩ではない。
姉貴の先輩。

一度、姉貴の忘れ物を
預かった記憶が
ボンヤリとある。
それから何度か会った
……ような、気がする。
あれ？

まあ、そんなだから、
先輩がオレのことを
覚えてなくても、
それほど不思議ではない。



オレは忘れないけど。
だってすごい
目立つ美人だもん。

背も高くって、
胸が……でつかくて、
ちよっと外国の血が
混ざってるみたいなの
金髪で。

最初に会った時の
夜なんか、
あのたわわな
おっぱいがチラついて、
寝られなかった
くらいだったもん。

忘れたところに
出会ったと
思ったら、
歯医者に就職
していたとは！



何やって
んですか、
先輩い！

いやですわ、
雪代さん。

先輩じゃなく、
ミナト先生って、
呼んでください
ね☆

しかも、視線を下げると…
超ミニの白衣で、
胸元がボンってしてて、
おしりもボンってしてて、
イマドキ流行らないとか
言われながらも
ムチムチボディは
オレの性癖を
刺激してきちゃう。

エっらい白衣の
歯医者さんコス。
サイコー。
男なんて、
単純なんだよお。



キラッと
ウインク。

こんなエッチな
歯科医がいて
いいのかよ。

これがAVだったら、
これからめっちゃエッチな
展開になるぞ。
フラグだぞ。
治療してる最中ずっと、
あのおっぱいが
頭とかに押しつけられ
ちゃったりしたり
するんだぞ。

『はあい。
おうち開けてくださいね。
下のおくちじゃなくて、
上のおくちですよ』
……なあって、
言われちゃうんだろうか。

それで……
フェラとか、
されちゃうん
だろうか。



うわあああ。
何考えてんだ
オレ。

ていうか、
あんまりAV
観たことないから、
想像力が
貧困すぎる。

はあい。
椅子を
倒しますよ。

おくち
開けて
くださいね

オレの心を
読んだかのように、
先輩は子供に
言い聞かせる
みたいに言った。

覚悟を決めて
オレは、
ぎゅつと目を閉じ、
あーんと大口を
開けた。

低いモーター音と
振動。
椅子が水平に
倒れていった。

カチャカチャと
器具の音。

ふわっと先輩の香りが
近づいてくる。

治療が…始まっちゃう。



どこが
痛いのか
ですか？

ほこ……
みいの
うへえの

右の上、
ですね

薄いゴム手袋を
はめた先輩の指が、
オレの口腔を
まさぐっている。

キュイイイイイ……
イヤな音が響いて
きた……







暴れると
危険ですので、
ベルトで
抑えちゃいますね

そう言いながら先輩は、
慣れた手つきで椅子の下から
シートベルトみたいなのを
取り出し、
力チャンと金具を嵌めた。

待て！ 歯医者って、
こんな設備あつたっけ？
肋骨の辺りを一箇所、
固定されただけに、
もう動けない。



なんですか！
これは！

快適で
しょう。
ふふ…

では
続けますので
おうち開けて
くださいねえ

最新式
なんですよ。
はい、じゃあ、
椅子をもっと
倒しますねえ

ベルトで拘束されちゃったし
もうジタバタできない。
諦めて、口を開けた。

：だけど、いきなり
なんだかわからないモノを捻じ込まれた。

あの嫌な金属の冷たさがない。

独特なおいもない。

だけど、すんごく気持ち悪い何かが

舌に乗っている。

生温い、ゴムみたいな、

ぼこぼこした形の……太い筒みたいなの……。

こんなの、絶対、歯医者器具にないだろう？

な…
なに？

ふふ…

さっきおくちに入れたモノより
もっともっと
すてきなモノ
ですよ

妙な感触のモノは
ぐにぐにとくねりながら
口の中を、出たり入ったりしている。

気持ち悪いよお…

だめ、もうダメ…

おえ…

おええ

耐えられなく
なつて、
げえつと
吐き出した。

あらあら
いけませんねえ

これは
お気に
召さなかつた
かしら？

そう言うと
先輩はついつと
身を引いた――

目を開けると
先輩の手には
オレが吐き出した
モノが握られていた。

ピンクの、シリコンの、
あからさまにアレを象った
……いわゆる、
ディルドーって
ヤツですかい。



そろそんなもの
入れないで
くださいよおお…

あら、じゃあ、
何を入れれば
いいって
言うのですか？

いつのまにか
治療器具を置く稼働台には
銀色の器具じゃなくて
カラフルな色のオトナのおもちやが
いっぱい並べられていた。



もっとぶっというのが
お好みでしょうか。
それとも動くのが
いいですか

ホンモノっぽい方が
いいのかしら。
舌触りとか？
お好みを言って
くださいね

そう言いながら
近づいてくる。



うつわあ……と、
気持ちにはイイてるんだけど、
身体は硬直して動けない。
逃げられない。

これが夢なら、
夢なら覚めてくれい！

心の叫びが
口から出そうに
なった瞬間……。

オレの悲鳴は
男根を模した棒状物体で
ふさがれてしまった。





……んむ
むぐ

あ……
あああ

はあい

痛いのは
ここですかあ

ぐっふ

む

ちあ
ちが……

あう

あら

では
こっち
かしら？

先輩の手で
操られているそれは、
オレの頬つぺたを
内側からつきあげ、
舌をぐりぐりした。

もう少し
ですよー
がまんして
くださいねえー

逃げたいのに
ベルトで
抑えられて
体が動かない。
声が出ない。

子供に言い聞かせるように
優しくささやきながら
手の動きは止まらない。
犯されてる、って思った。
オトナのオモチャで、
犯されてる……。

やめ……

うぐぐ

涙と鼻水とヨダレが
垂れてきた。
嫌悪感よりも、
息が吸えなくて、
苦しい。
足をバタバタさせて
なんとか気持ちを
伝えようと……

そんなに
暴れるくらい
痛かった
ですか？

ディルドーは
口に軽く入ったままだ。
今度は何をしようって
言うんだ？

はい

痛かったら、
こちらを見て
気を紛らわして
くださいね

先輩の手が
止まった。
「仕方ない
ですわねえ」
と言いながら
先輩はごそごそ
胸元をはだけ
始めた。



スーツの肩に
ふわっとしたものが
触れた。
あったかくて、
適度に重みがあつて、
ふかふかした……

先輩が口の中に
グイッと棒状のモノを
突っこむたびに、
乳房が揺れて、
オレの頬に触れる。

あ、おっぱいだ。
薄目を開けてみると
大きくはだけた
白衣の胸元から、
白い乳房が
はみだしてる。





ていうか、
おっぱいひとつで
気を紛らわせられ
てんじゃねーよ。
この軟弱な
オレの脳め。

張りのある肌
が揺れるたびに、
適度に硬い乳首が、
オレの頬や首筋を
くすぐっている。

あいかわらず、
ずっと口の中には
シリコン棒が
突っこまれて
んだよ！

でもな。
ある意味ものは
考えようだ。

女医さんに治療されながら
それでおっぱいでご奉仕して
いただいてると思えば……。
……悪くない？

オレ、流されてる？
人生で何度目か
わからないけど、
快楽に流されそうに
なっちゃってる？

先輩のおっぱいを
チラ見しておとなしくな
った
オレに先輩は
やさしく言った。





隙間から
もう一本。
唇をこじあけて
入ってくる…

く……
苦しい
苦しいよお

え…

あうう

慣れてきた
みたいですね

もう一本
入れてみま
しょうね



もうだめ
やめてえ

お願い
します

たすけて
……ッ!

息が吸えなくて
だんだん
意識が……

意識が……



あら？

大丈夫？

雪代さん？
雪代たかしさん？
聞こえますかあ

一瞬、意識が
飛んでいた。

気がつくと先輩は
背後に移動して
オレを
見下ろしていた。



急に動かなくなっ
たので
驚きましたよ

ふふ…
心臓マッサージ
しちゃいました

先輩は片足を
椅子の背に
乗せている。

オレの頭の
すぐそばに、
太もも。

白く肌理細やかな、
すべすべした内腿が
あった。

スカートの下の
生温かい体温を
感じられるくらい
近い。

形だけは顔を
そむけるも、
瞳はギリギリまで
傾けて内腿を
盗み見る。
見ちゃうでしょ！



ああ……もうすこしで、
スカートの下の暗がりか
……付け根が
……見える
かも……。

先輩の手は、
オレのシャツの
ボタンを外して
乳首をいじり
はじめた。

前屈みになった
先輩の胸が
頭に当たってる！

先輩は
おっぱいを頭に
太腿を肩と首筋に
こすりつけながら、
乳首をつまみ
あげた。



ふふ…
感じちゃって
ますね

おくちを
犯されて
その気になって
しまったの
かしら？

それとも
ココがいいの
かしら？

突然
乳首を
つまみあげた。

ち
違いますッ

いッ

痛ッ

意に反して
体がビクッ
と動いちゃう。

ベルトで
抑えられて
なかつたら
椅子から
落ちてた
ところだ。

やめて
ください
よお

ほんとに？

やめても
いいの
ですか？

指先で乳首を
ココココ転がし、
撫で、つつく。

乳首
いじられて
勃っちゃう
なんて。

ふふ…
可愛い
ですね

え？

首を持ち上げて
自分の身体を見下ろすと
…ヤバ…。
スラックスの前が、
ピンっとテント
張っちゃってるううう。



新入社員さんの
真新しいスーツが
いやらしいお汁で
汚されちゃい
ますね

や..
見ないで
ください
よお

足をモジモジさせて
股間を隠そうと
しても無理。
両足はとつくに
椅子からずり落ちてる。
腰に力が入らないから
足が上がらないよ。

意識しはじめると
余計に、
下半身に血が
集まっちゃう。
スラックスの布を
押し上げて
……キツイ。

そんなに
元気なのを
見せられて
しまうと

私も
たまらなく
なっちゃい
ますね

先輩の吐息が
甘く湿って
きた。

ゾクゾク
して
私も……

たまん
ないです
……♡

背後で先輩が
身じろぎした。
衣擦れの音。
多分これは

……今、
スカートを
まくり上げ
てる……。

そして腰が揺れ
一緒に胸も
揺れて……
パンティを……。

ゴクリと、
オレの咽喉が
鳴った。

甘酸っぱい
独特な香りが
ふんつと
立って……。

ペタッ

オレの首筋に
温かいモノが
押し付けられた。

なに？ この感触。
さっきのデイルドー
にも似た。
でももつと、
温かくて、
太くて。

恐る恐る首筋に
目をやると。





な、
ななな
な……

なんだ
これっ

男の、立派な、
カリも張ってる
しかも通常より
ぶつといサイズの
男根が目の前に
あった。

それがどう見ても
先輩の股間から
生えてるようにしか
見えないんだけど！

あら？
見たこと
ありま
さんの？

生殖器
ですわ

そそそ
それは
知って
ますう！

オレの頭にはたしかに、
先輩の女性の乳房が
ぽよぽよ当たってるのに？

先輩がおっぱいを揺らすと
股間のソレも動く……

えーと
もしかして

本物そっくりの
大人のオモチャ
……だった？

私の
ですよ。

お気に
召しま
せんか？

硬く反り返った竿が、
オレの頬をすりすり
し始めた。
間近にある、
充血した亀頭からは、
じゅわじゅわと汁が
滲んでいる。



まじか、マジカ、
マジですか！
これは夢かファンタジーか。
なろう小説の中に入っちゃったのか、オレ。

オレの、どうでもいい
逃避の思考とは裏腹に、
先輩の立派イチモツは
オレの口元に
近づいてきている。
すべてがありがたい。

無理。
生理的に無理。
常識的にも
倫理的にも
無理！

やだー
やだやだ
やめてー

これ
どけて
えええ

思いつきり
暴れるも、
ベルトで
固定されてるから
逃げられない。

やだあ

まあ
困ったわ

オレもッ
オレも困ってる！
やめてくださいッ

だってさっきまでは
歯医者の女医さん
におっぱい見せられて
エッチな妄想しちゃう
っていう妄想で
遊んでたのに。
こんなグロイモノを
間近で見せられたら、
ツライ。
泣いちゃう。

まだ治療は
途中だと
いうのに
どうしましょう

治療とかッ
今更なに
言ってるん
ですかッ

私の欲望も
はちきれそう
ですのに
責任取って
くださらない
んですね

もう
帰りますう

これ、ベルト
外して
ください！





早くうちに
帰りたい
そんなオレの
願いが通じたか
先輩は身を引いて
オレを縛りつけている
ベルトを外しはじめた。

意外と素直に
言うときいて
くれるんだな。
ちよつと
ホッとした。

だけど先輩は
不敵な笑みを浮かべると、
手袋をしたままの手を
オレの目の前に
差し出して：

パンツと打ち合わせた。



先輩はただ
「パンツ」と一回。
手を叩いただけ。

なのに、
オレはなんだか
起き上がることが
できなかった。

拘束ベルトは
外されてるのに
体が動かない。

ちよつと
もったいないって
思ったでしょ

え？

もう少し、
遊びたいかもって
思いましたよね？

言われてみれば、
そんな気がしてきた。

…気がする…



じゃあもつと
くつろいで
くださいね

上着、
脱いじゃい
ましょうね

は…い

スーツの
ジャケットを
脱いで
床に落とした。

今日は
いい天気で
暑いくらい
ですよ

そう…
ですね

だんだん暑く
なってきた。
シャツのボタンを
下まで外す。



ネクタイは
そのままの方が
ステキです

私の好み
ですけど

オレも…
そう
…思います

ですよ
私たちが
気が合
いますね

そう…
ですね

先輩は、
オレをじつと
見つめている。



でも
ベルトは
外した方がいいと
思いますわ

だって
まだパンツの中で
おちんちんが
元気ですよ
ものね

開放して
あげたい
ですね

ベルト外して
パンツ脱いじゃい
ましょうね

あ……

言われて
みれば……

オレは
椅子に横たわった
ままの姿勢で、
器用にズボンを
下ろしていた。



先輩は
椅子に乗ってきて
オレを跨いだ。

ズボンから
解放された愚息が
天に向かつて
そそり立ってる。

すっごく
恥ずかしいぞ。

でも反面、
見られてるのって、
ちよつといいかもって
思っちゃってる。

そして先輩の…
巨大なブツが
目の前に
ぶら下がって
いた。

ほんとに
ちゃんと
生えてる…

熱い肉棒が
ビクビク
してる…

うふ♡
かわいい

おちんちん
挟んじゃい
ましようね

ぎゅ♡

さっきはただただ
グロテスクに
思えたのに、
今はなぜだか、
エロティックというか、
浮き出ている
血管とかもかっこよく
見えてきた。



あなたの
おちんちん
舐めて
あげますから

あなたも
私のを
おしゃぶりして
くださいね

あ…
はい…

自分でも訳がわからない。
言われるがままに
先輩の黒光りする先端を
咥えていた。

いい子
ですね

先輩は
おっぱいで
挟んだまま
オレのを
舐めはじめた。

うふ♡
おいしい

舐めても舐めても
お汁があふれ出て
びしょびしょ
ですね

ちゃぱろ

ぴんちゅ

鈴口をちろちろ
くすぐってる。
腰が浮いちゃうくらい
気持ちいいいいい…



私のもの
おいしい？

ぐわ
ぐわ

おいひい
…れす

ぐわ
ぐわ

本当に
先輩のちんぽは
おいしい…

独特の芳香…
とろりとした
汁…

もっと
欲しい？

ほ…
ほしい…

ぐわ
ぐわ
もっと
ぐわ
ぐわ

オレのおねだりに
こたえて
先輩はグツと
腰を落とした。



いきなり
体重がかかった。
先輩のちんぽが
咽喉の奥を突いた。

ぐっ
ぐあッ

太さと硬さを増した
ブツが
オレの口を
犯していた。

な……
なにこれ！
信じられない！
ぶつとい……



さあ
ちゃんと
受け止めて
くださいね

あうっ

むり…

だめ…
唇が裂け
ちゃうよ

咽喉が
壊れちゃうっ

う
め
っ

ちゃぶっ…

でも
目の前を上下する
肉棒から
目が離せない。

口が犯されるのと同時に
先輩はオレの
ズボンとパンツを押し下げ
肛門をいじりはじめた。

ちよ……

らに、やって
るんでひゅかあゝ

ふふ……

あのね
横にモニターが
あるの
見えるかしら？

横目で見るとたしかに
普段は歯の
レントゲン写真なんか
映されるモニターが
すいーっと移動してきた。

あら

画面はまだ
映ってない？

あう…

いいもの
見せて
あげますから

ちょっと待って
くださいね

突然モニタが
明るくなった。
一瞬何が映っているのか
理解できない。

人の肌…
先輩の手袋した指が
赤黒い部分に…



なんだなんだ
なんだこれは！

たぶんオレの体の
見たこともない角度の
映像…
先輩の中指を咥え
こんでる…

今まさに進行中の
映像…

先輩の指が動くと
オレの肛門の感覚も
変わる。
入口をぐにぐにと
いじる感覚…



見えています？

私、今
あなたのお尻の穴
楽しんでますのよ

やぶ

袋も
もみもみ
しちゃっ
てます♡

や

やめて
くだひゃい！

次は
コレ、入れて
みましょうね



や…

あっ
あああ…!

なんか、入ってきた。
指より太い…モノ。
ぬるっ、ぬるっ…っと
指よりももっと
奥まで。

い

痛っ

痛くは
ないでしょ

ちゃんと
ほぐした
でしょう



んっく...

んっ

変な形のものが
入って...
入ってくるうゝ

潤滑剤は
問題なしですよ

さっきあなたが
ちゃんとおしゃぶり
してましたからね

ぐい...つと
ピンクの棒が
押しこまれた。

こっち
だって

ぢゅく

ぢゅく



アナルデイルドーと
口を犯す肉棒が
シンクロして
オレを犯している。
激しくなる。

どんどん
激しくなる。

せんぱあい
もう…

ゆるひ
てえ…



何がダメなのか
わからないけど、
もうダメって思った瞬間
先輩の動きが止まった。

ぬるっと、
口に頬張っていた
ぶつといいものが抜けた。
お尻の穴からも…

助かった…



気づいてないの
かもですけど
あなた今
軽くイってましたね

先輩の声が
遠くから聞こえる。

え？
オレ、イったの？
射精した感じは
無かったけど。

下腹部がじわあつと
気持ちいい…けど…

だんだん意識が
クリアになってきた。

先輩が見下ろしていた。
先輩の下半身からは
やっぱり、何度見ても
ブツイものが
そそり立っている。

さあ今度は
自分で足を開いて
ごらんさい。

私におちんちんを
見せるように

こう…
ですか？

オレは
言われるがままに
股を開いた。

でももう
これ以上は
開けない

あ、
はい…

もっとうです

お尻の穴も
見えるくらい
ですよ

んー
仕方ないですね
私もお手伝い
しましょう



先輩はデイルドーの
コードと手で
オレの膝を固定すると
なんと、オレの愚息に
足を…靴を…

つまりは
踏みつけた

そして
ぐいっと腰を
突き出した。





軽くイっちゃった
この子は
踏んでオシオキ
しなきゃですよね

あう

さあ
どうして
欲しい
ですか？

このかわいい
おちんちん
いじめてほしく
ありませんか？

あ

いじめて
ください…

踏まれてるのに
じわっと快感が
背中を駆け上った。

どうしちゃったの
オレ…



このまま
踏みま
しょうか？

それとも
さっきみた
くでされたい？

踏んで

踏んで
ください！

どういうふう
に踏んで欲しい
のかしら？

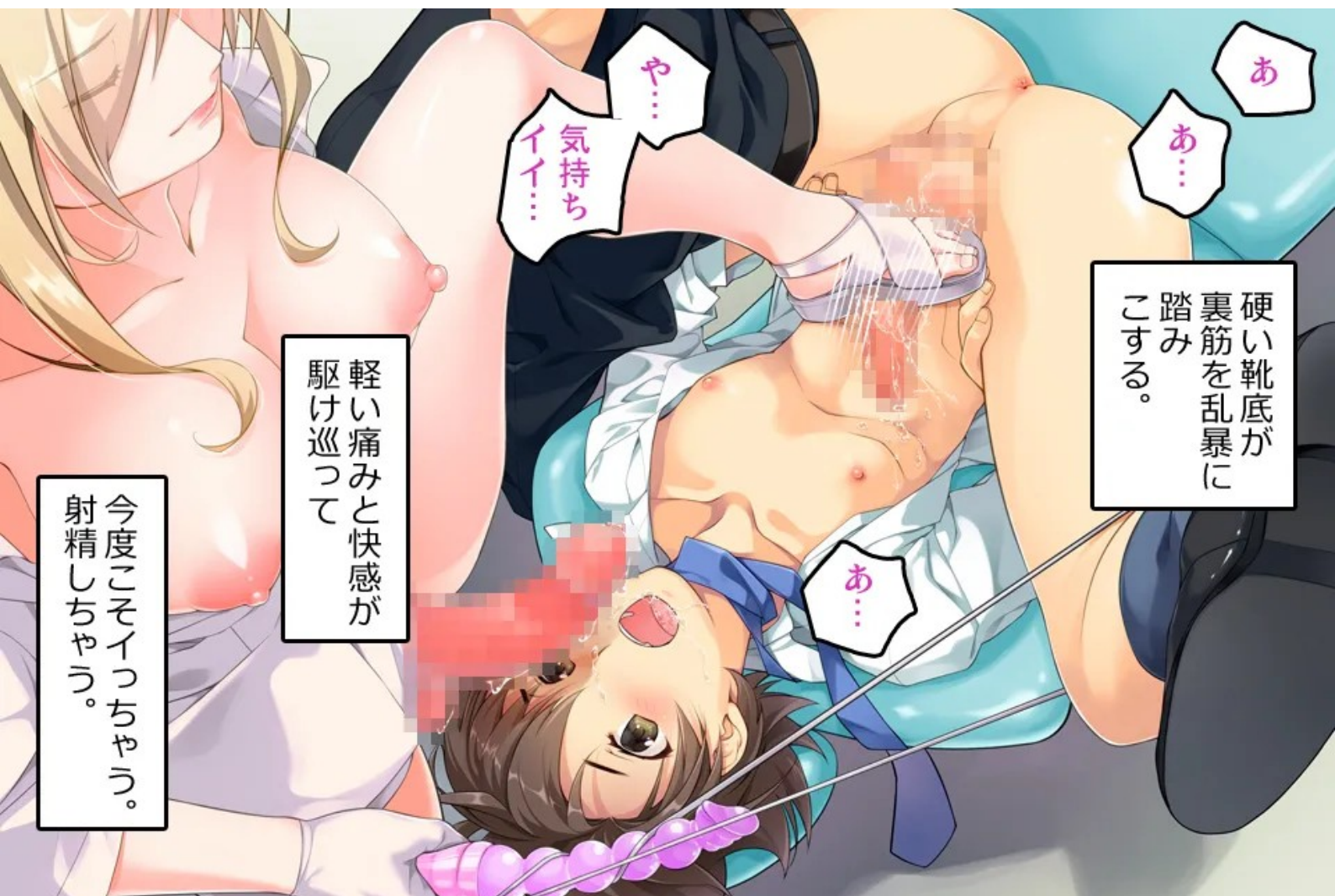
言って
ごらん
なさい

もっと
強く

踏みにじって
ください！

考えるよりも先に
声に出してしまった。

恥ずかしい。
これがオレの本性
なのか？



あ

あ…

硬い靴底が
裏筋を乱暴に
踏み
こする。

あ…

や…

気持ち
イイ…

軽い痛みと快感が
駆け巡って

今度こそイっちゃう。
射精しちゃう。

あら？
こんなことで
感じちゃうの？

あ…
はい

そんなだらしない
顔しちゃうくらい
気持ちいいの
ですか？

気持ち
いいで
しゅ

もう、イっちゃう。
生まれて初めて
踏まれてイっちゃう。

滴り落ちる
先輩の汁を
受け止めながら

いつちやう
ガマンでき…ない

と、

ギューつと
根元を踏まれた！

まだダメです
ひとりで
イクなんて
許しませんよ





え？
イカせて
くれないの？

生殺し
ってやつ？

なんで？

ダメ？

私だって
楽しみたいん
ですよ

さあ
どうやって
ご奉仕して
いただける
かしら？

どうしよう。
目の前で揺れてる
先輩のを舐める...

のは
さつきやったし。



ぐるぐる考えてると
勃起したちんぽの裏
っていうか奥っていうか

さっきまで
デイルドーに
刺激されていた
あたりがじんわり
疼いてきた。

ここを
もっと…

突いて欲しい。
太くて遅しい
もので…

そう丁度
目の前にある
先輩の…



挿れて…

先輩の
太いの…

オレのこゝ…
お尻に…
挿れて

くださいっ

オレはいつのまにか
声に出して
懇願していた――



先輩は回りこんで椅子を跨ぐと
オレの腰を持ち上げた。
オレってば、為すがまま…

はい

挿入前に
コスコスしま
しょうね

見なくてもわかる
先輩のとコスリ
合わされてる。

ゴツゴツした
熱い感触…

混ざり合った汁が
いやらしい音を
立てている。

挿れてくださいとは
言っちゃったけど
本気？





ほら

もうそろそろ
あなたの中に
入りたいって

私の
ギンギンに
なっちゃって
ます♡

あ…

えーと
今からやめる
とか…

ダメ
です♡

かぶせるように言うと
先輩は腰を引いた。

お尻に亀頭が
当たってる。



あ…
入って
くる

先輩の…
すご…

あんなに
広げてたのに
まだキツイです

いいわ…

太っ

いい…

あっん

さっきとお…
違うう…ツ

太いものが
捻じ込まれる。

奥まで…



動き
ますよ

途端
先輩は腰を
叩きつけた

ひあッ

あん

さっきも
ずいぶん
よがってました
よね

私のは
いかがかしら？

あ…

いいですう



どこがいいのか
言って
もらんなさい

何が
太いん
ですか？

せんぱいのツ
太くてえ

せんぱいのっ
チンポっ

すごい
ちんぽお

...いいッ

いいッ

あッ

う...

あッ

ギッ
ギッ

ギッ
ギッ

ギッ
ギッ

めっ
めっ

めっ
めっ

めっ
めっ



激しく叩きつけ
グラインドし
内側をかきまわす。

じゅくじゅくと
ふたり分の汁が
音を立てている。

喘ぐ自分の声が
メスっぽくて、
恥ずかしくて、
でもその声に
欲情してしまう。

イカせてえ

いッ

あんっ

あん

イクう

あっ





ちようだい いい

イヤらしい音を
室内に響かせながら

先輩は小刻みに
腰を揺すり、
オレは甘えるような
声をあげて――

一緒に、
白濁液を撒き散らした。







叫んで、出し切って
目の前、真っ白。

安心してると
先輩が傍にきて
見下ろしていた。



たいへんいい子に
してましたね

最後に
ちよっただけ
おまけです♡

お口
開けて
くださいーい



顔いっぱい
先輩の精液を受けながら
すうつと意識が
遠のいていった…

雪代さん
雪代タカシさん

助手の女性の声に
はっと目を開けた。

ヤバい。オレは歯医者さんで
なんてことをしたんだ…
ていうか、なんてこと
させたんだよ、先輩！
とつさに下半身に手をやると、
ズボンは穿いている。

当たり前だが、存分に撒き散らした
精液の跡もないし、においだって
残ってない。



夢？
なんであんな夢をみてしまったのか。
オレ、先輩のこと好きなのかな？
会いたいのかな？
それとも先輩にああいうプレイをされるのを、
深層心理では望んでいるのかな。



先輩とはもう、一年以上会ってない。
今頃なにしてるのかな、先輩。
ちよつと懐かしい。
ただなんとなく、ただ理由もなく、
また会えるような、そんな気がした――

おわり